

鳥獣害ゼロへ！

日本農業新聞取材班・著

本書のように、これだけ多数の固有名詞が登場する書籍は多くないだろう。それは、2種類の固有名詞で彩られているからである。一つは、地名としての固有名詞である。登場する日本国内の地域は、おそらく100カ所を超え、さらにイギリス、ドイツ、フランスと海外の地域も紹介されている。固有名詞の数だけの多様な取り組みがあり、それぞれの地域が、固有の方法で鳥獣被害に立ち向かう姿が活写されている。

もう一つの固有名詞は名前である。集落のリーダー、JA職員、ハンター、研究者として、いろいろな人々が鳥獣害にひるまずに前進する姿が描かれている。本書で多用されている写真は、多くのケースで彼らをローアングルから捉え、対象に向かい合う強い決意が表されている。



◇出版＝こぶし書房
◇価格＝1800円
◇副題＝集落は私たちが守るッ

「農山村再生」の案内役に

つまり、本書は、「地域」と「人」が鳥獣害に苦しめられる中で、そこから、「地域」と「人」が立ち上がり、さまざまな創意工夫をしながら、それを克服しつつあることを語るルポルタージュであり、対策の指南書・アイデア集であり、そして地域紹介の書でもある。

農業ジャーナリスト賞（農政ジャーナリストの会主催）を受賞したこの連載は、日本農業新聞の掲載時から話題となっていたが、このように一冊の本としてまとめられると、あらためて、この企画の視覚の斬新さと同時に、農業専門紙のメリットを活かした取材力の高さに気が付かされる。

◆女性の力に焦点

特に出色なのは、「人」に関して、女性をハイライ

トしている点である。ハンターとして、対策の指導者として、「皮革なめし」の技術者として、そして皮文の継承者として、女性たちが活躍している。彼女たちが持つコミュニケーション力と積極性が、対策には求められることを教えてくれる。推測するに、連載の取材班の中心に女性記者がいて、彼女たちの目線と重なることにより、実現した取材ではないだろうか。

もう一つのポイントは、「地域資源」としての野生動物の可能性を明らかにした点にある。いまや、シビエ（野生の鳥獣肉）料理として鹿肉などの利用は各地で挑戦されているが、それだけでなく、野生動物ツアールの対象として、また皮革製品や角の装飾品として活用する現場も描かれていた。

る。さらに、なめし革加工品（しおり、スリッパなど）の過程で、障がい者就労を実現する地域もある。いままでは知られていない可能性の発掘であろう。

◆問われる地域力

こうした本書には、「集落は私たちが守るッ」というサブタイトルがある。それは、「鳥獣害対策は地域づくり」であることが含意され、本書の大きなメッセージとなっている。そこには、二重の意味がある。一つは、地域のコミュニティ（集落）の力なくしては、この難題を乗り越えることができないということである。その点で、鳥獣被害対策には地域力が問われている。しかし、逆に、鳥獣害対策を一つのばねとして、地域づくりが進む可能性がある。その点で、鳥獣被害は、地域の一つの潜在力でもある。

このように捉えれば本書は、実は「農山村再生」のガイドブックと言える。鳥獣被害の有無にかかわらず、「地方創生」を願う多くのの方に、分野を超えて、この力作を玩味していただきたい。